

あふみが  
必要だ

非幸少年と共に生きて

II

小野木義男

# 『Boon-gate』のPDF作品を ご覧いただく前に…

## 操作について

- 作品の多くは「もくじ」のページで、進みたいページの項目を押せば、そのページまでジャンプし、また、ジャンプしたページのタイトルを押せば、目次のページに戻るよう設定しております。
- 直前に開いていたページに戻るには、画面上の「◀」ボタンで、直前に開いていたページに戻ります。

## 読み方いろいろ

- 通常は画面の「倍率」が100%前後になっていますが、「倍率」を150%まで高めると文字が読みやすい大きさになります。
- 通常は「見開きページ」で設定されていますが、「単一ページ」にすると読みやすく感じます。
- 読み進めるときは、「十字キー」を使用すると手軽です。
- 「サムネイル機能」を使用して読み進めると、2～3頁からとばし読みするのに便利です。
- 頁を「回転」させることが可能です。地図などを拡大して見るときに便利です。

<http://www.bungeisha.com/PDFis/05-top1.html> でPDF作品についての説明を致しております。ご参照ください。



きみが  
必要だ  
II

非幸少年と共に生きて

小野木義男

文芸社

この道一筋

非幸少年と

おくらにまかせ

4613

はじめにかえて

子どもと共に輝く小野木義男さん

1968年春、小野木さんの母校である日本福祉大学に赴任した私は、司法部時代には教護院（児童自立支援施設）にも時々お邪魔し、「事件」に関わるお力添えや、研修生たちの研修をお願いしてきました。当時大学生が「実習で何を獲得すべきか」は新しい課題でした。然し小野木さんたちに巡り合って、それは「現場人」たる基礎的力量的獲得は勿論、大切なことはトータルな実践力を支える生きた実践の「源泉」に気付くことではないか、現場人の存在自体が発揮する「オーラ」に気付くことではないか、と思うようになってきました。

小野木さんは、そうしたオーラを発揮してきた本格的現場人の典型で、何よりも子どもたちが「生きる」ことを喜び、「非幸少年」が自らの力で「幸」を獲得する感性和力量の「生きる力」を育てる事業に惚れ込み、率先して「楽しんできた」御仁だと思わずにはいられません。

「こんなところにも生命がある」と、新しい発見に惚れ込む子どもたちの姿は30年に亘る「写真教室」にも示されています。ここでは小野木さんが、子どもの感性の素晴らしさを教えられ、技術でなく「心でとらえればいい」（『軌跡——国児学園九十年史』1998年）との境地に達したほど、素晴らしい作品が続出しました。写真集も2冊出版されていますが、写真に一番惚れ込んだのは他ならぬ小野木さんでした。更に小野木さんが惚れ込んだのは陶芸でしょう。拙宅の仕事部屋入り口を案内してくれているのは小野木作の陶製電気スタンドですが、小野木宅にも所狭しとばかり作品が並べられています。それは小野木さんが子どもたちと一体になって夢中で製作に励む姿を彷彿とさせてくれます。小野木さんの創作意欲は子どもたちの創作意欲をかきたて、小野木さんと共に子どもたちが生きる喜びを歌っています。

更に広い「非幸少年」の親たちも、小野木さんとともに感動体験を重ねて「非行をのりこえ」て来ました。〈東海・「非行」と向き合う親たちの会〉の代表者として、会員である親たちの悩みに耳を傾け、時に親たちを自宅に招いて共に陶芸の「命」に触れる。ここにも小野木さんの真骨頂が発揮されています。

こうした例を挙げればキリがありませんが、同時に小野木さんは「子どもを育て護る文化」の伝達者です。国児学園長としての重責を担いながら、地元の三重大学や母校の日本

はじめにかえて

福祉大学をはじめ多くの高等教育機関の講師を引き受け、自治体の各種専門委員としても活躍しながら、あのオーラを発揮してきました。

また私などの病状を気遣いながら、ご自身の体調の不具合については全く語らず、この道一筋に生きて来られました。

今私は、我が身の不甲斐なさを恥じ入りながら、小野木さんの「永遠のいのち」に光栄あれと祈るばかりです。

日本福祉大学大学院教授 山口幸男



きみが必要だⅡ  
非幸少年と共に生きて

●  
目次  
●



透明人間

はじめにかえて 山口幸男… 3

## 第一部 教護院の背景

学園の子どもたち

——差別や疎外の中に生きて——

暗く厳しい背景… 23

教護院（現児童自立支援施設）の役割… 26

自信回復を目指す教育… 30

疎外される学校生活… 33

非行少年は実在しない… 35

精神のペダル

県社会福祉協議会から教護院へ… 42

教育と福祉の谷間

54

学園の正月風景

59

教育を語る

67

弱さの自覚から自立へ…67

駄目人間なんていない…71

子どもに学校の選択権を…76

教育の課題

82

——置き去りにされた「育」——

## 第二部 園での暮らし

### 小野木寮

夫婦制のスタート…87

夏期訓練期間（七月二〇日～八月三一日）…88

### 人間らしい生活を目指して 小野木典子

小学生集中編成のねらい…90

人間らしい生活目標…91

生活表現と寮舎の雰囲気…93

寮舎の日課…93

テレビ番組…100

学習…102

就寝…102

朗読と読書…103

食事…105

編成当初一カ月の状況…106

食前…106

食事中…106

食後…107

その後の食生活…109

教母として心がけたこと…110

一 子どもたちと共に…110

二 「なさい」「なさい」よりも後ろ姿で…110

三 善悪についてははっきりした姿勢を持つ…111

四 ケンカの仲裁はひと呼吸おいて…111

五 自分の子どもには私は二役であることを教える…111

寮母の単独寮運営記録（三カ月間）

116

寮母の単独寮運営奮闘日記——小野木典子…118

### 第三部 自立への挑戦

#### 自立への挑戦

163

国夫の事例：164

少年院から国夫の手紙：178

寮長から国夫へ返信：180

私たち二人で愛知県のS少年院で国夫と面会：183

国夫から来信：184

再び国夫から来信：185

寮長から国夫へ発信：186

国夫から来信：187

雄治の事例：189

昭和五五年三月 雄治来園：192

四月 雄治夫婦で来園：192

## 施設不適応児への援助

——繰り返し返す非行の背景にあるもの——

考察…198

197

## 第四部 ここにある教育の原点

### 人間評価の非妥当性

——教護院は主体性の回復を目指せ——

203

教護児の成績評価…204

指導要録所見欄の例…206

教護児の行動評価…209

認知されない教護院の教育…212

教護院にこそ教育の原点がある…216

人間理解を阻害するもの

—— 教護院の生活指導はこれでよいのか ——

218

目指すものと現実との食い違い …… 219

整理されていない指導目標 …… 222

指導者側にある自己矛盾 …… 225

認められない児童の人格 …… 226

A君の告白から学ぶもの …… 228

教える者と教わる者との距離 …… 231

むずかしい経済性の学習 …… 233

ある化石教護の独白

—— 失うものと、失ってはならぬものと ——

237

叩かれる教護院の自立 …… 240

専門機関としての児童相談所の現実 …… 242

沖繩現地報告

——本土復帰にまつわる少年非行とその周辺——

第一日（二月八日） …… 252

第二日（二月九日） …… 259

第三日（二月一〇日） …… 269

第四日（二月一日） …… 275

第五部 問われる大人の生き様

心に届いた手紙

——国児学園卒園生——

「非幸少年」いま子を思う幸せ …… 281

心の教育 …… 284

問われる大人の生き様 …… 286

- 私がこの道を選んだ理由……288
- 言葉の裏側考えて——閉塞状況の子どもの事件……291
- 我慢しきれず “爆発” —— 傷害事件の背景にストレス……293
- 悲しい愛の渴き——せめて叱られる時だけでも……295
- 輝いていた教え子——事故死の妻忘れず四年間……298
- 思い出という “きずな” —— 子どもたちとの夜回り……300
- 自立までは見守る——卒園生との頻繁なつきあい……302
- 大変身した「卒園生O」——15年ぶりの再会……305
- 父ちゃんに頼らず自立を——教護院……307
- 心を結ぶもの……309
- 非行の「背景」に目を……311
- 不幸な事件……314
- 専門性軽視の行政……316
- 人生のペダル……319

## 第六部 講演録・インタビュー他

### 講演Ⅰ 児童自立支援施設に求められるもの

——内在する自己矛盾と再生への道——

325

一年生教護が学んだもの… 327

再生への道… 335

学校教育と施設内教育… 340

寮舎エゴイズムと閉鎖性… 345

管理と指導… 347

子らの可能性に学ぶ… 358

死角と視覚… 361

体罰と言葉の暴力… 367

自主と自立… 373

結び… 377

他者否定は自己否定… 384

乱発される罰や禁止… 385

講演Ⅱ 子どもたちと共に暮らす意味

388

国児学園へ、動機は不純… 390

子どもたちと暮らしを共に… 391

メディアの取り扱い… 395

子どものストレスについて… 396

卒園生との太い絆… 411

I Q君に学ぶ… 417

インタビュー NHKラジオ深夜便「こころの時代」 425

——きみが必要だ——

——非幸少年と共に——… 425

小舎夫婦制とは… 428

非行の背景にあるもの… 431

国児学園が目指す再教育… 433

苦しさの中で学ぶ…437

非行は自己存在のアピール手段…439

非幸少年の意味…440

非行の歯止めとなるもの…443

子どもの生き様に学ぼう…445

掲載記事 “捨てられた個性”に光

——元三重県立国児学園長 小野木 義男さん——

448

追悼抄…448

小野木さん逝く

——『非幸少年』たちと共に生き——

451

あとがきにかえて…454



第一部  
教護院の背景



蟹気楼



## 学園の子どもたち

——差別や疎外の中に生きて——

### 暗く厳しい背景

「先生、息子のN男はどうですよ、少しは変わりましたか？」ある日曜の夕暮れのことである。面会に訪れた母親に、不安そうな表情でこう問われた私は、小学生のうちからの施設に子どもを預けたことが不憫で、一刻も早く自分の手許に引き取りたいと思う親の心情は当然のことだと思ひ、母親の気持ちを先取りして「そのうちきっとお母さんに喜んでもらえる日が来るから、今しばらくあの子に時間を貸してやってほしい」と答えたのだが、母親の心配は実は別のところにあったのだ。

N男が入園している間、母親は同棲していた男との間に子どもを産み、それを契機に再婚入籍し、姓もSと変わった。ところが、N男は母親の旧姓のままなのである。男が絶対に彼の入籍を認めない、かかわりを持ちたくないと、拒否的なのだそうだ。こうして離れ

て暮らしている間は、なんとかごまかしも効くが、N男が退園したら家庭の中はどうなるか、そのことへの不安がどうやら母親の本音であるらしい。「中学の卒業までにあと三年しかない」という、その表現の中にも拒否的な感情がうかがわれたのである。母親にしてみれば今度こそと、すべてを賭ける思いで擲かんだ幸せを逃したくない一心から、心ならずも出た本音であったのかも知れない。その気持も私には痛いほどにわかる。だが、N男の立場はいったいどうなるのか。彼にだって幸せを求める権利があるはずだ。

盗みなどの非行があったにせよ、一人息子の彼は、五年生から母親の手許を離れた施設生活で一年余になる。相変らず自己中心的で偏屈、何事にも不平不満が強く、その感情コントロールができないまま相手構わず衝突する。まるでケンカの仕掛人のような毎日であるが、そんな彼にも、時には布団をかぶって泣きたくなるような、つらい、淋しいことだつてあるだろう。彼は彼なりに精いっぱい一日を生きているのだ。その彼にこの先、いったい何を目標に励ましてやればいいのか。この現実をどう伝えたらいいのか。

だが、こうした事態とは全く無縁であるかのように、彼は面会もそこそこに、母から持つて来てもらったTシャツに早くも手を通し、得意気にサッカーボールを蹴っている。その姿を見てみると、この教護院という非現実的な世界の中にだけ、彼らの束の間の幸せが存在するのもかも知れないとさえ思うのである。

- 酒乱の父親が母親を殺害するという、生き地獄に居合わせるようになった中二のA男。
- 六年生の時、父親が事故死。その通夜に灯明が倒れて自宅を全焼。母親が水商売に出るようになったが、やがて泊まり込むようになった男に性的いたずらをされた中三のB子。
- 父親のギャンブルが高じて多額の借金。勤務先からは給与明細の紙切れしかもらえない状態に、母親が見切りをつけて蒸発。ますます生活が乱調となってサラ金に手を出し、動きのとれない父子家庭の中三のC男。
- アル中の父親は全く働かず、生活保護費のほとんどが酒代に化け、夫婦ゲンカが絶えず、遂に母親が出奔した中三のD男。
- 中一を筆頭にゼロ歳まで、七人の子どもと妻を残して父親が事故死。まさに崩壊家庭の小五のE男。その彼に対して「母ちゃんかあは前とぜんぜん変わつとらへん。母ちゃんは男の人つくつとるぞ。だから母ちゃんとこへもどつても、前みたいにしよんべんちびつたら水かけられて、ごはんももらえやんぞ。おしっこもぬすつともなおして早う姉ちゃんといっしょに（姉が引きとられている家で）くらそう」という手紙が届いた。他人の世話になりながらも弟を励まそうと、たどたどしく綴つたこの六年生の姉の手紙は、母親を真つ向から否定しているではないか。一方、夫の訃報を産院で聞いたという母親は、さながら奈落を見る思いであつたに違いない。その母親にだつて言い分はあろう。だが、

# 途中省略

本編はダウンロード時間短縮のため省略版でお届けしています。  
途中省略なしの完全版をご希望の方は製品版をご「購読」ください。

## 著者プロフィール

### 小野木 義男 (おのぎ よしお)

昭和12年5月、岐阜県加茂郡川辺町にて出生。父戦死により極貧母子家庭に育つ。

昭和33年3月、中部社会事業短大（現・日本福祉大）を奨学資金やアルバイトで卒業。

社会福祉協議会勤務を経て、昭和36年4月～（37年間）、三重県立国児学園に勤務。

昭和59年4月園長となり平成10年3月定年退職。

この間、全国教護院協議会副会長。中部十県一市教護院協議会会長。

暁学園短大、江南女子短大、国立三重大学、聖十字福祉専門学校、日本福祉大学中央福祉専門学校及び日本福祉大学社会福祉学部にて、非常勤講師として「養護原理」「児童福祉」等担当。

三重県青少年健全育成ビジョン専門委員会、人権教育基本方針検討委員会、子ども人権問題専門部会、等各種委員会委員。

東海「非行」と向き合う親たちの会世話人代表。

平成17年11月永眠 享年68歳。



著書 『「ぼくらの写真展15年記念集」——国児学園写真教室15年の歩み』『「ぼくらの写真展30年記念作品集」——国児学園写真教室30年の歩み』『軌跡——国児学園九十年史』『「きみが必要だ」——非幸少年と共に生きて』（平成11年）（各私家版）

## きみが必要だⅡ 非幸少年と共に生きて

---

2007年1月15日 電子出版発行

著者 小野木 義男

発行者 瓜谷 綱延

発行所 株式会社文芸社

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1

電話 03-5369-3060（編集）

03-5369-2299（販売）

<http://www.boon-gate.com>

© Yoshio Onogi 2007 Corded in Japan

ISBN4-286-02277-3

（文芸社発行の通常書籍（紙の本）については、全国書店でお尋ねいただくか、「文芸社ON-LINE」サイト、<http://www.bungeisha.co.jp>を御参照ください。）